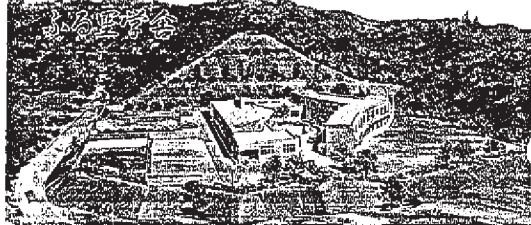


社会福祉法人 佑啓会



佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学会

〒290-02 市原市今富1110-1

☎0436-36-7611

発行者 里 見 吉 英

編集者 三 股 金 利

おだやかな日々を

里見 吉英 土日草大

明けましておめでとうございます。平成九年の幕開けはいかがでしたか。

昨年は、ふる里学会にとってもまた私自身にとってもめまぐるしくもあり、充実した一年であった様に思います。(それも今にして思えばということですが……)

年始めに全社協よりバン格拉ディッシュの福祉事情について視察の依頼を受け、その準備をしている最中、急遽行き先がネパールに変更になり、下調べもそこそこに飛び立った事。現地で目の当たりにしたことは、想像をはるかに越えるショッキングなものでした。

そして、年も押し寄せました頃、これも突然、第一回希望の翼(千葉愛護 近畿日本ツーリスト共催)の団長に指名され、障害者・家族施設職員の総勢百十三名という大部隊でハワイに飛び立った事。

(内容は中村さんの文章をどうぞ。知的障害者の海外旅行についてあまり深く考える事のなかった私に貴重な経験を与えてくれました。何事も体験してから考えよう。

この様に昨年は、海外で始まり海外で終わるという自分からは進んで実行しようとは思わなかった状況が作り出され、様々な経験を積む事ができ、人の生とは何か、人の

喜びは、等々、原点にかえる良い機会となりました。

ふる里学会の幕開けは、三年近く眠り続けていた温室がようやく動き出したこと、月カトレアの様にハデな人。スズランの様に憂うしく……私の世代の人なら誰でも知っているこのメロディー。そのカトレアが春先に見事な花をつけ皆を喜ばせました。そして暮れには、めずらしい黄色のカトレアも誕生。(どちらか山越洋蘭センターの社長さんの尽力に負うところが大きい。)施設というところは、とかく暗い印象が付きまといがちです。そのイメージを一新することをめざして歩んできた学舎のシンボルとして今後も咲き続けてほしい。

さて、今年はどんな年に？小春日和の中、寮生達がソフトボール・フライングディスク等に興じている。それを眺めながら職員はたわいのない会話をはずませている。

こんなごく平凡で穏やかな情景がいつまでも続きますように。

(施設長)



希望の翼

中村 君子

アローハ

常夏の国、ハワイに行ってきた。千葉県愛護協会・近畿日本ツーリスト共催の「希望の翼」の企画です。

「お母さん、休めますか？」といきなり電話をいただき「えっ！」「ええ……」と一瞬たじろぎはしましたが、「ノー」の答えは出ませんでした。

真治の為ならせつかくのチャンスを見逃すことはない、家族一同意見が一致して参加させて頂くことになりました。とはいっても真治は生まれて初めて飛行機に乗るのですから、恐がって座り込み動けなくなってしまうイメージが頭から離れず、しばらくは眠りの浅い日々が続きました。

それでもその心配は余所に、いざ成田空港に着くと「ふる里学舎」の仲間がおりましたので安心したのでしようか、大喜びの様子です。

日本から出国するには、事前の説明がたくさんあり、なんせ二人分のものを私たち父兄がやるのですから、みんな必死で旅行会社の事前説明を聞いていました。搭乗チケットをすませ、やっと機内に入った時は、気疲れしてしまいました。

いよいよ離陸。何回経験しても飛行機が上昇するとき、グリーンと

体を持つていられるのは緊張します。だから真治が心配の面持ちで私を見ていたのも無理はありません。

機内で夕食をとった後、就寝するのですが、真治はおも眠れないうらしく窓の外の暗い景色を見ては、私を起こします。やっぱり気が高ぶっていたのでしょうか。

日付変更線を経て、やがて外の景色がバアと明るくなり、オアフ島が眼下に見えてきた時は、みんな「ワー」と歓声を上げました。そして、ホノルル空港に無事着陸。デンファレやカーネーションをきれいに編み上げたレイを一人一人の首にかけてくださり、「アローハ、ハワイだ」と実感しました。

眠い目をこすりながら第一日目の市内観光が始まりました。真珠湾、ヌアヌ・パリ、イオラ二宮殿マジックアイランドなどを観光。遠くからの眺めでしたが、真珠湾(パールハーバー)は、昔日本軍の奇襲攻撃を受け何人も兵士が命を落とした戦艦が今でも湾の下に沈み、その上にアリゾナ記念館が建っております。あのきれいなスカイブルーの水の中に、と思うと感慨深く思わず両手を合わせていました。ヌアヌ・パリで写真撮影、バコタレストランで昼食。

ハワイは、ずっとバイキング方式の食事が続くのですが、いかに南国らしく、トロピカルカラーのゼリやドリンクがたくさん並んでいました。免税店に案内され店内に入ったのですが、出口がわか

りずらく迷路の様に作られていると事前に聞かされていたので、早めにきりあげました。「はやくホテルに着きたいと思っていたから」夕食は、ホテルのレストランでおいしい食事をたくさん食べました。でも、もう眠くて眠くて部屋に入りパタンキューと寝てしまいました。(その時刻は、八時三十分ころかな?)早寝のいいあつて朝はすっきり。モーニングコールも苦痛ではありませんでした。純井さんと那須川さんは、飛行機の余韻があつたのか体が宙に浮いたり沈んだりの感じがして、あまり眠れなかったらしい。

いよいよ二日目。午前中、シーライフパークの観光。さながら鴨川シーワールドと言わべきか。イルカのショーは、日本の方が上手。なんて言ったらおこられちゃうかもしれないませんが、全部英語の説明でわからなかったから。それでも子供達は、よろこんで手を叩いていました。昼食後、ポリネシア文化センターへ。

ここは、南太平洋に浮かぶ、七つの島を風光明媚に紹介。日本人向けに日本語を習った学生が、私達を案内してくれました。それにしても流暢な日本語を話すには余程、練習されているのでしょう。

それでもサモアのショーの中で(これは、時間待ちの時少し見ただけ)「ジャバニーズクルクルパ」と言ったのを聞いた時、冗談ながら、少し腹が立ちました。

(裏面へ続く)



(前面より続き)

さあーて、今日は夕食までに二時間ある。何よりもうれしいショッピング。あの話題のナイキ「エアーマックス」の靴。あれだけは絶対ハワイで買おうと予定していましたが、丁度、真治のサイズに合う靴があったのですが、かなり品薄でした。そのお店で、二人の子供を雇らせ、真治さんと買いものに奮闘する姿を、施設長にすっかりみられてしまいました。

そして、夕食はロイヤルガーデンで中華料理、けっこう品数も出ておいしかった。老酒も最高、「ちなみに松橋先生は、アサヒビールを注文してありました」

三日目。クアロア牧場、アクティビティークラブへ。午前中は乗馬射撃等々、私達は乗馬を選びました。始めは、恐がつて尻込みしていた子供も、頑張って馬にまたがり、柵の中を二、三周すると、少しずつ顔に余裕がでてきました。そして次の人と交替。真治は競馬を見るのが好きなのでたずなを引いてしまいい注意されてしまいました。それにしても真治をエスコートしてくれた男性が、ハンサムボーイでトム・クルーズにそっくりでした。伊藤さんに「ねえねえ、真治はいいから、トムクルーズをとって!」と頼んだら「真治君のお母さんはおう・」と言われてしまいました。

昼食後は、マリンスポーツ。とは言っても私達のツアーの仲間には水辺の泳ぎとカヌー遊び。何回か

にわけてカヌーに乗ったのですが近畿日本ツーリストの志賀さんがずつとカヌーを押していた姿には頭が下がります。お疲れ様でした。

夕食は鉄板焼きの店。「紅花」でした。日本のテレビでも紹介されたらしいですが、手さばき良く調理しながら、お肉の焼き加減を聞かれ「ミディアム」と皆さん注文。施設長だけ「ベリーグッド」とやっぱり食通。でも施設長が正解。「ミディアム」ではせつかくのお肉がバサバサ。もったいないことをしました。施設長のお話では、アメリカに來たら焼き加減は日本より一ランク上げて注文するのだそうです。ミディアムならレア。レアならベリーグッド。今度はそうしよう。今度とはいつかあてはないけれど。

四日目。待望のフリーデー。斎藤さんと予定通り、早朝にアラモワナの海岸を散歩。ホテルに戻り朝食。そしてショッピング。祐介君も真治も親に似てショッピングが好き。「ショッピングに行く」「イエーイー」と手を上げて賛成。まるで漫才コンビの二人の様に後ろからよくついてきます。と。感心します。どのお店も皆この子供達に親切です。安心して買物ができます。オアフ島で一番大きなお店アラモワナ・ショッピングセンターが私達のホテルの二階から続いていることが何よりラッキー。お陰で帰国後支払が大変そう。ま、いいか。ショッピング

中、井口さんと伊藤さんにお会いしました。二人共大きな紙袋を下げていました。やっぱり私達だけではなかったのです。

夕方からバラダイスコープアラウでサヨナラパーティー。フラダンス、ポリネシアダンスが素敵でした。それにしても、ダンスはよく腰が動きます。凄く訓練しているんじゃないか。「よくもまあ」と皆感嘆。

「今度の三月の旅行は、余興にこのダンスをハワイ組でやろう。松橋、おまえが責任者だ。」と施設長がおっしゃいました。「待つてください。私ダイエツトしますから」と言う。松橋先生が「いい。いい。そのお腹がブルブルするのがいいんだから。」でも私だつて女。「シェイプアップしますからネ。」大いに笑つて、大いに楽しんだ最後の夜でした。

「コーヒー」が「コーフィー」と発音が交わる頃になるともう帰国なのです。それぞれの思い出をもつて、一路ホノルルの空港へ。機内でもみんなマナーが良いのは感心します。なに真治はヘッドホンをつけ、足を組みカッコつけて隣に座っています。「カッコいいじゃん!」と言うと「〇」と指でサイン。

何事も無く皆無事に帰国でき安心しました。関係者、近畿日本ツーリストの方々には、大変お世話になりました。楽しい旅行が出来たことを深く感謝いたします。ありがとうございます。

弟

斎藤 理麻

私の弟は障害者である。けして恥ずかしいとは思わない。今では誇りに思っているくらいである。こう思わせたのは両親の努力に他ならない。

私が幾つときだったかは定かでないが、恐らく四つくらいの時だったろう。弟が普通の赤ちゃんとは違ふと思つたのは、その時から私の人生への道は変わったのかもしれない。いや変わつて良かつたのかもしれない。病院の先生に「祐介は幾つになつたら歩けますか」と質問したところ、先生は「歩けるようになつてますよ」とだけ答え、幾つとまでは言わなかつた。母は後に話していた。そこで三才で歩かせてみせると主張し、この日から訓練の毎日だった。

弟が生まれる前まで、両親の愛情を一人じめにしていた私にとって、弟の存在は邪魔であつた。しかし、どうすることもできない私は、ただただ訓練に明け暮れている母の姿を見ることができなかった。

「誰にも相談することを許されないとはいひ込んでいたのだらう」全て自分で判断し、行動するという性格は、この時からだったのかもしれない。母にこれ以上苦勞はかけまいと幼いながら、私は先の先まで考え、行動する子供になつていた。

母の努力が実り、弟は三才で歩けるようになった。今でもけして忘れることはない。ぎこちなくとも、一歩、一歩と歩くその姿は私達家族にとつてかけがえのない一瞬だった。



ロサンゼルスに行ったとき、街で偶然障害者を運れた家族を見かけた。日本でも同様の光景はある。しかし、違ふところは、障害者をもつた人一人の人間として扱っている姿であつた。こういう子供が家族であることに恥じることなく、誇らげな顔をしていたのには感動した。

母の姿や、弟と同じように障害者を持つていて人達と接しているうちに、徐々に自分が変わつていくのを今になつて分かつたような気がする。

母は、弟が生まれたことは、宿命だと言つた。自分だから弟が生まれたのだとも言つた。弟が生まれたことをけして後悔していない母をたくましく思い、尊敬している。私も母だつたからこそ、弟は安心して生まれてこれたに違ひないと思う。そして、私が姉だからこそ弟は生まれてこれたと思えるようになりたい。こういう大切なことを氣付かせてくれた母に深く感謝している。

時々私を叱りつけてくれる弟は、私にとって、また、父や母にとつてなくてはならない家族の一人である。

編集後記

忘年会。一年の様々な苦勞を忘れるという宴会です。嫌なことはすぐに忘れる夕チの私には必要がないもののはずですが、誘われるままにあちこちと顔を出し浴びる程呑んでしまうのは、ただの酒飲みなのでしょう。お陰で年越しの二日酔いといった感じです。

新年を迎え気持ち新たに、毎日の努力をおろそかにせず、一歩一歩を着実に踏みしめながら、今年も良い年にしたいものです。

今年一年の皆さんのご健勝とご多幸をお祈り致します。

飯田 俊男